

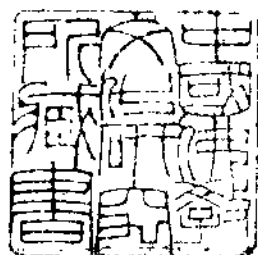
000359

教学研究紀要

佛教文化論集

第三輯

川崎大師教学研究所編



川崎大師教學研究所

同	幹事	研究員	同	同	同	同	同	同	專門員	同	同	同	参	所
内藤隆昇	寺田隆明	野沢隆幸	福田亮成	吉田宏哲	今枝二郎	布施淨慧	斎藤昭俊	佐藤隆賢	牧尾良海	滝沢讓	馬本克美	茂木隆応	原教運	高橋隆天
(平間寺教務部 教務課課長)	(平間寺東京別院 薬研堀不動院主監)	(平間寺 法務部部長)	(大正大学講師)	(大正大学助教授)	(大正大学講師)	(大正大学講師)	(大正大学教授)	(大正大学教授)	(大正大学教授)	(平間寺常務)	(平間寺總務)	(平間寺執綱)	(平間寺院代)	(平間寺貫首)

昭和五十六年五月二十一日 発売
川崎大師教學研究所研究紀要
佛教文化論集(第三輯)

◎ 編集

川崎大師教學研究所
代表 高橋隆天

発行

〒210 川崎市川崎区大師町四番四八号

印刷

株式会社 共立社印刷所

〒101 東京都千代田区神田神保町三丁目一〇番

春山宇平

刊 行 の 辞

大本山川崎大師平間寺貫首
川崎大師教学研究所所長

高 橋 隆 天

川崎大師教学研究所は、昭和四十七年に設立されて以来、弘法大師教学ならびに各専門分野にわたる学術関係の研究において着実な成果を挙げつつあることは、まことにご同慶の至りである。

当教学研究所員ならびに当山縁類各位によって結成された「空海上人遺跡参観・川崎大師友好訪中団」が、弘法大師の足跡を追慕して中国を訪問し、（昭和五十五年十一月一日より十三日迄）所期の目的を達成し得たことは、きわめて意義深く、且つ有難いことであった。すなわち、一つには青竜寺遺跡を参観し、中国仏教協会をはじめ仏教・友好諸団体を表敬訪問して、空海上人とその師・恵果阿闍梨を祀る記念堂の建立を推進するために現代中国における要路の人々と会見したこと、二つには各地に散在する仏教諸寺院を参拝し、現在の中国における仏教の立場と信仰の在り方などを、或る程度核心にふれるまで観察することが出来たこと、したがって、これらの事実を通して、日中両国の友好を深めるとともに、もっとも念願とするところの目的が達し得られたことは、きわめて重要な意味を

もつものであると確信する所以である。(因みに、中国訪問に関する詳細は「川崎大師だより」特集号・第二三九号を参照されたい。)

さて、このたび当教学研究所の編纂によって教学研究紀要『仏教文化論集』の第三輯が刊行されるに至ったことは、欣快に堪えないところである。

本論集は、弘法大師ご誕生一千二百年讃仰記念事業の一環として設立された当研究所の専門員諸師の努力によって昭和五十年三月にその第一輯が発刊され、つづく第二輯は当山開創八百五十年慶讃の記念として昭和五十二年十月に刊行された。

しかるに、当研究所は、この第二輯刊行後に、研究所専門員・吉岡義豊博士が突如としてご遷化なされるという非常に大きな不幸に見舞われたのである。その悲しみ、まことに深く、哀惜の念に堪えないところである。

吉岡博士は、この『仏教文化論集』にも該博な知識を傾注して、第一輯に「中国民間の地獄十王信仰について」、第二輯に「太上玄宗科儀とその解説」を執筆された。同博士が世に残された数多くの貴重な文献をはじめとして、後進に対する親切なご指南書は、今後も充分に活用されて余りあるものがあると信ずる。

その後、当研究所としては、専門員として新たに今枝二郎、吉田宏哲、福田亮成の三師を迎え、吉

岡博士を失った悲しみを乗り越えて研究所の充実を図り、前任専門員の諸師とともにすぐれた研鑽の努力が続けられていることは、まことに力強い限りである。

ここに、あらためて『仏教文化論集』第三輯の刊行を喜び、二・三の私考に加えて推頌のことばを述べたい。

本輯冒頭に掲げる佐藤隆賢師の『吽字義』考——においては、宗教家であり、思想家でもある空海の諸著作の中の『吽字義』について、多くの著書を引用しつつ奥深い考察が試みられている。「一字に千里を含む」高邁な真言密教の深淵さが判読される所以といえよう。

『仏教文化論集』第二輯に、師が発表された「六大説について（即身成仏義）」とともに、まことに説得力にみちあふれた論述であるといえよう。

福田亮成師は、静かな若手学究の徒である。師は本輯に「理趣経の成仏論」を寄せている。

真言宗においては、理趣経ほど大切な、また通常読誦されている経典はない。長文のこの經典の内であって、——特に十六大菩薩生をめぐる——と、他の文献と対比しつつ説くところ、まことに興味深い。師の論じようとする深い真実をこそ是非把握したいものである。

布施浄慧師は、第一輯・第二輯に引き続いている「作法集の研究」である。

諸作法の実修に伴う解説であるが、身・口・意三業清浄としての実修・実証上、また祈願と供養の

諸作法中にある、事相という深秘な中にも、その親切なご指南はうれしい。それぞれの行法において、しっかりと身につけて頂きたいものである。

風水思想は、遠く中国の思想・文化にその影響を与えてから永い年月を経てきたが、この思想は、また日本文化の各方面にも大きな影響を与えながら展開されてきた。

この風水思想に関しての第一人者である牧尾良海師は、本輯に「風水思想と科学の間——上——」の論題を掲げている。

師は、「この小論は……（中略）……中国の風水思想をとりあげ……（中略）……代表的と思われるもの数篇を選んで、その大概乃至一部要点を読み下したものである。——」と、謙虚に書かれているが、その示された内容にはまことに興味深いものがある。好論文といえよう。

東南アジア、特に留学したインドにおける豊富な経験と、すぐれた学術的な視野をもたれる斎藤昭俊師は、今回は「インドの自然神」に論題をとり、民族宗教の信仰の立場から、多くの実例をあげて論説するところ、まことに興味は尽きない。師が民族学に精通し、数多くの著作をもち、斯学の啓蒙に努められていることは、今更紹介の労をとる必要もあるまい。

今枝二郎師は、とりわけ唐代の宗教と文化の研究に大きな関心をもっている人である。

私事で恐縮であるが、中学生時代から歴史が好きであった私は、その頃「東洋史」という名で呼ば

れていた中国史には特に興味をもち、遠い中国の歴史とシルクロードの夢、邪馬台国との関連など、ひと時として私の脳裡を離れることがなかった。

今枝師は、「玄宗皇帝の宗教政策」という論文において、数多くの文献を掲げて微に入り細にわたって論述を試みているが、その努力には驚かされるものがある。玄宗皇帝の思想的な動向と楊貴妃との出会いに関する記述も、また大きな歴史の一頁として観察するとき、はなはだ興味深いものであるといえ、決して見逃すことは出来ないであろう。

なお、同師については、吉岡義豊博士の愛弟子であり、且つ中国に多くの知己をもち、両国の友好に努力していることを書き添えておきたい。

吉田宏哲師は智山派の海外留学生で、西ドイツ・ハンブルグ大学に学んだ。『大日経』を中心としての研究に熱心で、西洋哲学からみた密教思想についての広範な研究は、師の特異な分野を形成している。

本輯においては『大日経』住心品漢藏対照索引、『大日経疏』住心品索引をまとめている。『大日経』と『金剛頂経』その他の定められた章疏は、本派の所依の經典である。この完成された索引が、また実に膨大なものであることに注目したい。この苦心になる索引が広く活用されることを期待したい。

おわりに、当教学研究所の専門員諸師のご健筆に敬意を表するとともに、今後ますますそれぞれの研究業績の向上を祈念してやまないとこゝろである。

なお、当研究所の牧尾良海博士が、この『仏教文化論集』第三輯が上梓される頃に大正大学学長に就任されるという朗報に接した。

ここに、あらためてお祝いを申し上げます。

佛教文化論集 第三輯 目次

刊行の辞	高橋隆天	一
『昨字義』考	佐藤隆賢	一
理趣經の成仏論	福田亮成	一〇
——特に十六大菩薩生をめぐって——		
作法集の研究	布施淨慧	一〇九
風水思想と科学の間(上)	牧尾良海	一五三
——風水説批判論の探尋試論——		
インドの自然神	斎藤昭俊	二三三
玄宗皇帝の宗教政策	今枝二郎	二五五
『大日經』住心品漢藏対照索引		
『大日經疏』住心品索引	吉田宏哲	一

『呬字義』考

佐藤隆賢

目次

はじめに

一 呬字の字相釈

(一) 訶字の字相釈

(二) 阿字の字相釈

(三) 汙字の字相釈

(四) 廢字の字相釈

二 呬字の字義釈

(一) 訶字の実義

(二) 阿字の実義

(三) 汙字の実義

(四) 廢字の実義

三 呬字の字義合釈

まとめ

はじめに

宗名を真言宗と称し、あるいは、その思想内容を真言密教と標榜しているように、「真言」には、言語・文字・声字などに対して、深く鋭く考察が続けられてきた結果を示し、その思想背景を象徴しているとも言うことができる。したがって、歴史を遡るならば、大乘仏教の諸經典はもろろんのこと、古くはインド思想にその源流を見出すのであるが、今ここには、弘法大師空海の思想的な特色を把握することに視点をおいて、大師の諸著作において顕著に認められる声字や文字に対する独特の観察・思考を検討し、その根拠や意図、さらには、それがどのように展開されているかについて考察しようとするものである。

それには、真言宗にとって根本所依の經典として重要視されてきた『大日経』や『金剛頂経』を始めとする密教経軌を典拠にした、大師の著作を広く調査しなければならないが、既に他の論文において、これらに関する部分的な発表をしているので、今回は、文字解釈の具体例を示している『呬字義』を取上げて、これを中心に、その一端に触れてみたい。

一 卍字の字相釈

この『卍字義』一卷は、梵字の「𑖀」(卍)を解釈して、この一字に含まれている種々な義を展開して、真言密教の教義が、仏教の深義を幾重にも掘下げて解釈し、その深秘義を明したものであることを証明したものである。大師には、他の多くの著作においても、このような字相・字義の解釈が見られるばかりでなく、仏教の本質的な問題に対する究明がなされた『声字実相義』一卷を始め、仏教の原典・原語への指向から考察されている『梵字悉曇字母并釈義』・『大悉曇章』、あるいは、文章論とも言うべき『文鏡秘府論』六卷、『文筆眼心抄』など、さらには、名筆を証するものとして知られている幾多の遺品によって理解し得るように、言語・文字に対する幅広く、多面的な思索と、実際の研究が続けられていたのである。

したがって、ここに『卍字義』を検討するに際しては、当然そのような大師の実績を踏まえながら考察しなければならないのであるが、ここでは、『卍字義』を中心に考察したい。

『卍字義』そのものは小部な著作であり、構成も極めて単純であって、本文の冒頭に、

一の卍字、相と義と二に分つ。一には字相を解し、二には字義を釈す。

とあるように、咩字を解釈するのに、字相・字義の二門に開いて、仏教教義を展開しているのが本書の大綱である。

すなわち、ここに説述される「咩」字とは、梵字の「𑖀」字 (aṃ) であって、梵字悉曇における字体構成上の規則 (摩多・体文、切継、字義) に沿って、この「𑖀」字が四字、すなわち、訶 (ha)、阿 (a)、汙 (e)、麼 (eṃ) の合成に依るところから、「𑖀」字に含まれる四字それぞれの解釈に、浅略なる字相積と、深秘なる字義積を施し、さらに、これらの分離した解釈に対して、四字を綜合した「𑖀」字の解釈＝合積を施して、そこに幾重にも仏教教義を展開している。

これによって、「一字に千理を含む」と説く真言密教の深意を具体的に例証したものと言えよう。

以下、本文の説文にしたがって内容を検討してみたい。前掲の文から、字相積に入るのであるが、「𑖀」字が四字から構成されるところから、始めに四字に分離して解釈 (別積) している。すなわち、本文には、

初めに字相を解すとは、又四に分つ、四字分離の故に、『金剛頂』に、此の一字を釈するに四字の義を具す。一には賀字の義、二には阿字の義、三には汙字の義、四には麼字の義なり。

とあるように、その典拠が『理趣釈』にあることを明しているが、その本文は『理趣經』の初段 (金剛薩埵章) の末に掲げられている真言「𑖀」字の釈である。今『理趣釈』の文を示せば次の如くであ

る。

即ち大衆金剛不空三昧耶本誓の心真言呬字を説きたもう。呬字とは因の義なり、因の義とは謂く菩提心を因と為す。即ち一切如来の菩提心なり。亦是れ一切如来の不共真如の妙体にして、恒沙の功德は皆此より生ず。

此の一字に四字の義を具す。且く賀字を以て本体と為す。賀字は阿字より生ず、阿字一切法本不生に由るが故に一切法は因不可得なり。其の字の中に汚（汗）の声あり。汚（汗）の声は一切法損減不可得なり。其の字の頭上に円点と半月と有り、即ち謂く廢字とは一切法我義不可得なり。我に二種あり、所謂人我と法我なり。此の二種は皆是れ妄情の所執なり。名づけて増益の邊と為す。若し損減・増益を離るれば即ち中道に契う。

これに基づいて、『呬字義』においては、呬字が有する四義、すなわち賀・阿・汗・廢の四字の字相釈を掲げている。

(一) 訶字の字相釈

一に賀字の義とは、中央本尊の体是れ其の字なり。所謂賀字は是れ因の義なり。梵には保怛𑖀二合と云う。即ち是れ因縁の義なり。因に六種あり。及び因縁の義の中に因に五種あり。『阿毗曇』

に広く説くが如し。若し訶字門を見れば、即ち一切の諸法は因縁より生ぜざること無しと知る。是を訶字の字相と爲す。

右の訶字の字相釈の説文中、傍線の部分は、『大日經疏』卷第七（具縁品⁽¹⁰⁾）の字義釈段の一節である。猶因についての五種・六種の説は、指摘があるように、『阿毘達磨俱舍論』卷第六・第七卷の「六因・四縁⁽¹¹⁾」に関する説文を指している。すなわち、この段には、「能作因・俱有因・同類因・相応因・遍行因・異熟因」の六種の因について詳細な論究がなされ、続く四種の縁「因縁・等無間縁・所縁縁・増上縁」についても、それぞれの釈文が見られるが、因縁に関する「六因の内に於て、能作因を除いて所余の五因は是れ因縁の性なり。」の説文である。

また、「梵には係怛嚩と云う」とあるのは、梵字悉曇においてはそれぞれの文字について、形・音・義の三面から考察されていて、今の「訶」または「賀」字は、梵字の「𑖦」の音(He)を表わした音写であるが、その義は、「因」を意味する梵語の「係怛嚩」(Heṭṭi)を表示すると解釈している。

これは訶字ばかりでなく、梵字悉曇の基本（字母）として、摩多（母音）『十六字、体文（子音）』三十四字、計五十字が、前掲の『梵字悉曇字母并釈義』、さらには、不空訳『瑜伽金剛頂經釈字母品⁽¹²⁾』に示されているし、今日でも、真言宗における梵字悉曇の基本として学習されているのである。

したがって、これは単に表音とか表意、あるいは象形文字という範囲内だけでなく、仏教教理に結

びついた意義（字義）を内包し、それらが組合せ（悉曇切経）によって、種々な字義を展開しているところに、ことさらに、真言（mantra）宗を標榜する意図の一端を認めることができる。

以上のような関係から、本文の「賀字の義とは、中央本尊の体是れ其の字なり。」とあるのは、いわゆる形の上で、卍字（義）の中心となる字体が「𑖀」であることを明していることが理解できる。

（二）阿字の字相釈

次に、阿字の字相釈を見るならば、

二に阿字の義とは、詞字の中に阿の声あり、即ち是れ一切字の母、一切声の体、一切実相の源なり。凡そ最初に口を開くの音に皆阿の声あり。若し阿の声を離るれば則ち一切の言説なし。故に衆声の母と為す。若し阿字を見れば則ち諸法の空無を知る。是を阿字の字相と為す。

とあるように、『大日経疏』の文（傍線）を中心に「阿」字の釈文が示されているが、この「𑖀」字には、真言密教の教義が象徴されていると言えらるほどに、極めて重視されてきた文字である。

前掲の『大日経疏』の文の前には、『大日経』の「云何が真言教法、謂く阿字門は一切諸法本不生なるが故に、迦字門は、𑖀、𑖀の一節（傍線）を釈して、

即ち謂く阿字門等、是れ真言の教相なり。相は体に異ならず、体は相に異ならず。相は造作の

修成に非ず、人に示す可からずと雖も、而も能く解脱を離れずして、声字を現作す。一一の声字は、即ち是れ法界に入る門なるが故に、名づけて真言法教と為すことを得るなり。至論せば、真言法教は、応に一切の随方諸趣の名言に遍すべし。但し、如来出世の迹は天竺に始まるを以て、伝法の者は且らく梵文に約して一途を作して義を明すのみ。

右の文に明説されているように、梵文（梵語）すなわち聖語に対する尊重の意と、さらに、梵語によって開示されている仏教教義を背景にして、その第一文字としての位置にある阿（阿）字に対する考察は、特に思想的に掘下げられて解釈されている。これは、この阿（ॐ）が、否定的な接頭音を示すところから、「不・非・未・無」の意味を持ち、これが仏教思想の「空」・「無」の深意に积されることも、阿字が重要視される理由の一つと言える。

また、梵字悉曇の上で、あらゆる文字の最初の点を「阿」点と称しているように、「一切字の母」・「一切声の体」・「衆声の母」なることを具体的に教示しているのである。

（三） 汙字の字相釈

次に、第三の汉字の字相釈段においては、

三に汉字は是れ一切諸法損減の義なり。若し汉字を見れば、則ち一切の法の無常・苦・空・無